

## 第5講 マンティネイア：アンタルキダスの平和後のスパルタの同盟政策

テキスト

Xen. *Hell.* 5. 2.

[1] 以上のように彼らが望んだようにうまくいったので、彼らは戦争中同盟諸国の中で攻撃して来たり、ラケダイモン人に対してよりも敵に好意を寄せていた者たちを懲罰し反抗できないように仕向けたのであった。それ故にまず最初に、彼らはマンティネイア人に対して派遣して、さもなければ彼らが敵に与することはないと信ずることはできないと申し述べて、市壁を撤去するように命じたのであった。

[2] というのは彼らは自分たちが彼らと戦っている時に穀物をアルゴス人に輸出したこと、一緒に出陣するのを拒んだ時に休戦を口実としたこと、従軍した時には嫌々一緒に出陣したことを知っていると言ったのであった。更にまた自分たちが好調だと彼らは妬み、不運が降りかかったときには有頂天になったことも知っていると言ったのである。更にマンティネイアの戦いの後 30 年間続いた平和がその年に終わると言われていた。

[3] その後市壁を撤去しようとしなかったため、彼らに対して宣戦布告したのであった。アゲシラオスは、メッセニアに対する戦争でマンティネイア人の都市がしばしば自分の父に手を貸してくれたと申し立てて、自分をその指揮官の職から免除してくれるように国家に嘆願したのであった。アゲシポリスが軍を指揮したが正に彼の父パウサニアスはマンティネイアの民衆派の指導者たちと友好的であった。

マンティネイアの降伏

[5] ……水に抗うことが出来なくなると、町を取り囲む市壁のどこかが倒壊して捕虜となるようなことになるのではないかと怖れて、撤去することに同意したのである。しかしラケダイモン人は、村落に散住するのでなければ、講和条約を結ぶことはないと言ったのであった。それに対して彼らはやむを得ないと認めて、同意し講和条約を締結したのであった。

[6] 60 名もの、親アルゴス派の人々や民衆派の指導者たちは殺されるのではないかと怖れたが、彼の父がアゲシポリスからポリスから退去する安

全保障を手に入れていたのである。そして市門から始まる街道の両側にラケダイモン人が槍を携えて立ち、退去していく者たちを見守っていた。そして彼らを憎悪していたにも拘らずマンティネイア人の貴族派の人たち以上に彼らは拘ることなく抑制したのであった。そしてその事こそ偉大な命令への服従の証拠であると言うべきであろう。

[7] それから市壁は取り払われ、太古と同じように人々が居住することで、マンティネイアは四つに分住したのである。その結果一方では家屋を取り壊し、他方では建築しなくてはならなくなったことに、最初は彼らは苦しんだのであった。しかし資産家たちは村落の近くに彼らに所属する所有地の近くに住み、他方では貴族政治に遭遇し、デーマゴゴスの重圧から解放されることを望んでいたのも、起きたことに喜んだのであった。そしてラケダイモン人は彼らに対してたった一人の渉外官を派遣するのではなく、各村落に派遣するようになったし、民主政時代よりも熱心に村々から一緒になって従軍したのである。そしてマンティネイアに関してはこの様に成し遂げ、川が城壁を貫くように構築すべきではないと人々はより一層賢くなったのである。

#### DS. 15. 5.

[1] 以上の諸事件と同時にラケダイモン人は、次に述べるような批判で、成立したばかりの条約を尊重しないで、マンティネイア人に対して戦争を決定したのであった。アンタルキダスの平和という包括平和がギリシアにおいて始まると、それによってすべての諸都市が駐留軍を撤去し、合意に基づいて自治を獲得したのに対して、ラケダイモン人は本性からして他人を支配したがりがり性向からして好戦的だったので、平和を重荷として従わず、かつてのギリシアの支配権を願望して武力行動への準備を整えて干渉し始めたのである。）

[2] 彼らは直ちに諸都市を混乱の中に引きずり込み個人的な友人の手を借りて、彼らに政治的混乱を引き起こす確実な出発点である党派間の争いをそれらの諸都市の中に率先して起こしたのであった。というのは自治を取り戻すと彼らはラケダイモン人の支配の時代に当局であった人たちが

ら説明を求めたのであったからである。民衆は過去の不正を覚えているので告発は厳しいものとなり、多くのものが追放され、党争に敗れた者たちに彼らは援助を提供したのであった。

[3] このような人々を迎え入れ、帰国させる為に軍隊をつけて送り出し、最初に弱小諸都市を奴隷化し、その後は重要な諸都市に対して戦争を仕掛けて隷属国化し、2年もの間包括平和を守ろうとはしなかった。マンティネイア人のポリスが国境を接してあり、勇敢な人々に満ちているのを見て取ると、その都市が平和から強大化しているのではないかと疑いの念を抱き、人々の精神を萎えさせておこうと躍起になったのである。)

[4] それで最初はマンティネイアに使節らを派遣して市壁を解体し、すべてが古の五つの村落に住むように命じたのであったが、彼らは大昔にそれらの村からマンティネイアに集住したのであった。誰も彼らに注意を払わなかったので、彼らは軍を派遣してその都市を攻囲したのであった。)

[5] マンティネイア人はアテナイに使節を派遣し彼らに援軍を派遣するよう求めたのであった。しかしアテナイ人は包括平和を侵犯するのを好まなかったが、それにも拘らず彼らは攻囲に抵抗して敵軍と頑強に戦ったのである。以上のようにしてギリシアの地に新たな戦争が始まったのであった。

#### DS. 15. 12.

[1] ギリシアではラケダイモン人はマンティネイアを破壊し、マンティネイア人は夏中敵軍と立派に戦い続けたのである。というのはアルカディア人が勇敢に耐えるという点を鑑みて、またそれ故にラケダイモン人は戦闘においてこれらの人々を前列兵とし同盟諸国兵の中で最も信頼するのを習いとしていたのである。冬が始まり、マンティネイアの傍らを通る大きな川が嵐による雨を集めて水嵩を増すと、ラケダイモン人は大きな堤によって川の流れをポリスの方向に変え近くにあるすべての場所を水浸しにしたのである。

[ 2 ] その為に家屋が倒壊し恐慌状態に陥ったマンティネイア人はポリスを止むを得ずラケダイモン人に明け渡したのであった。都市を受け取った彼らはそれ以上はマンティネイア人に対して危害を加えず、昔の村落に分かれて居住するように命じたのであった。その為には止むを得ず自分たちの祖国を壊して地に均し、村落に居住したのであった。)

対同盟政策の見直し

Xen. *Hell.* 5. 2. 1:

「以上のように彼らが望んだようにうまくいったので、彼らは戦争中同盟諸国の中で攻撃して来たり、ラケダイモン人に対してよりも敵に好意を寄せていた者たちを懲罰し反抗できないように仕向けたのであった。」

コリントス戦争の経験

遠征拒否・消極的参加

平和条約締結による変化

同盟諸都市内部における政治勢力の変化

親スパルタ派と民衆派との党争と親スパルタ派の追放

ペルシア王との協力

平和条約の保証者

旧コリントス同盟の解体

アテナイの動向

アゲシラオスとアゲシポリスの連携

スパルタにおける意思の統一

同盟政策の強化

親スパルタ派による政権構築

民衆派の排除

同盟諸国とスパルタとの連携強化

イストモス・ルートの確保

マンティネイア～プレイウース～コリントス～オルコメノス

マンティネイア

## 反スパルタ外交の軌跡

前 421 年 アルゴスと同盟・ペロポネソス同盟離脱 (Thuc. 5. 21)

アルカディアの一部の属領化・・・パラシア (Thuc. 5. 33:)

属領パラシアはスキリーティスと隣接 (Thuc. 5. 33)

民主体制 (Thuc. 5. 29)

アルカディア諸国に対する影響力 (Thuc. 5. 29)

ペロポネソス同盟の条文：神ないし英雄神に差し障りのない限り、加盟国全体が統一行動をとるべしとの規約 (Thuc. 5. 30)

交戦の前歴・・・前 421 年 (Thuc. 5. 33)

前 420 年 アテナイ、アルゴス、エーリスとの同盟 (Thuc. 5. 47-48)

レプレオンをめぐる紛争にアルゴスとともに兵を派遣

(Thuc. 5. 50)

前 418 年 アルゴリスに兵を派遣 (Thuc. 5. 58：マンティネイア勢とその同盟諸兵)

オルコメノス攻略に参加 (Thuc. 5. 61)

テゲア攻撃を主導 (Thuc. 5. 62)・・・テゲアとの境にある川が紛争の原因 (Thuc. 5. 65：洪水の原因)

マンティネイアの戦い (Thuc. 5. 66-73；支配か隷属かをめぐる戦いと訓示：69)

エピダウロス侵入 (Thuc. 5. 75：エーリス、アテナイ、アルゴスとともに)

属領への支配権放棄 (Thuc. 5. 81)

前 414 年 敵対関係の継続 (Thuc. 6. 105)

前 413 年 傭兵としてアテナイのシケリア遠征軍に参加 (Thuc. 7. 57)

## コリントス戦争中の協力と反感

前 394 年 ネメアの戦いにスパルタ側に参加 (Xen. *Hell.* 4. 2. 13)

プレイウスは休戦中を理由に不参加 (Xen. *Hell.* 4. 2. 16)

前 391 年 レカイオン攻撃に援軍派遣 (Xen. *Hell.* 4. 4. 17)

前 390 年 マンティネイア人の反感→レカイオンの戦いの敗残兵をマンテ

ィネイア人の目を避けるために夜通過 (Xen. *Hell.* 4. 5. 18)

「τοὺς Μαντινέας ἐφηδομένους τῷ δυστυχήματι (マンティネイア人が不運に歓喜する)」(Xen. *Hell.* 4. 5. 18)

平和後の新たな党争

DS. 15. 5. 2 民衆の親スパルタ派に対する反感

告発と追放

口実

Xen. *Hell.* 5. 2. 2:

- 1) 「彼らと戦っている時に穀物をアルゴス人に輸出したこと」
- 2) 「一緒に出陣するのを拒んだ時に休戦を口実としたこと」・・・プレイウスのこと
- 3) 「従軍した時には嫌々一緒に出陣したこと」
- 4) 「自分たちが好調だと彼らは妬み、不運が降りかかったときには有頂天になった」・・・レカイオンの戦いの後敗残兵を率いてアゲシラオスが本国に引き揚げてくるとき
- 5) 「マンティネイアの戦いの後 30 年間続いた平和がその年に終わる」

実際の理由

Xen. *Hell.* 5. 2. 1:

「彼らは戦争中同盟諸国の中で攻撃して来たり、ラケダイモン人に対してよりも敵に好意を寄せていた者たちを懲罰し反抗できないように仕向けたのであった。」

DS. 15. 5. 3:

「マンティネイア人のポリスが国境を接しており、勇敢な人々に満ちているのを見て取ると、その都市が平和から強大化しているのではないかと疑いの念を抱き、人々の精神を萎えさせておこうと躍起になったのである。」

帝国時代のスパルタ人の心性

DS. 15. 5. 1:

「ラケダイモン人は本性からして他人を支配したがり性向からして好戦的だったので、平和を重荷として従わず、かつてのギリシアの支配権を願望して武力行動への準備を整えて干渉し始めたのである。」

戦後政策の一環

Xen. *Hell.* 5. 2. 1:

「以上のように彼らが望んだようにうまくいったので、彼らは戦争中同盟諸国の中で攻撃して来たり、ラケダイモン人に対してよりも敵に好意を寄せていた者たちを懲罰し反抗できないように仕向けたのであった。」

DS. 15. 5. 3:

「このような人々を迎え入れ、帰国させる為に軍隊をつけて送り出し、最初に弱小諸都市を奴隷化し、その後は重要な諸都市に対して戦争を仕掛けて隷属国化し、2年もの間包括平和を守ろうとはしなかった。」

- 1) アンタルキダスの平和の構造は維持・対外政策の前提
- 2) 対同盟政策の強化
- 3) 政治的敗者（親スパルタ派）を支援
- 4) 同盟諸国の隷属化
- 5) 包括平和の無視

民衆派の脆弱性

Xen. *Hell.* 5. 2. 6:

「60名もの、親アルゴス派の人々や民衆派の指導者たちは殺されるのではないかと怖れたが、彼の父がアゲシポリスからポリスから退去する安全保障を手に入れていたのである。」

60名！